

虹

に

薬を渡すだけじゃない

⑩理想を追求する薬剤師



担当する患者宅を訪れ、薬について説明する渡部さん

医療漫画といえば大抵は医師が主役だ。『ブラック・ジャック』や『医龍』などが名作として知られている。看護師を描いた作品も目立つ。

薬剤師ものは少ない。しかし、ここ数年では『アンサングシンデレラ』が話題になった。若く熱血な病院薬剤師の成長と、人生模様を描く。石原さとみさん主演でドラマ化されたことでも人気になった。

「もしかして薬剤師っていらなくない？」

漫画の初回にはこんな挑発的なせりふが登場する。主人公の薬剤師が医師と意見を対立させる中で、自らの職業の存在意義を問い直す一編だった。

高岡市で暮らす薬剤師、渡部 孝太郎さん(38)も目にした。「あのせりふ、僕にも刺さったし、他の薬剤師の皆さんにも刺さってほしい」

渡部さんの思いはこうだ。薬剤師の主な業務の一つに、医師の処方箋に従い、適切な量の薬を用意する調剤がある。絶対におろそかにできないが、最近ではロボットによって自動化されつつある業務でもある。医師や看護師のように患者と向き合わなければ、「カウンターで薬を手渡し人」と認識され、必要とされなくなるかもしれない。漫画の主人公が悩むように、薬剤師の存在意義が失われてしまう。

渡部さんは東京出身で病院勤めだった。あるべき薬剤師の姿を求め、気付けばたどり着いたのが富山県内の薬局だった。在宅医療に重きを置く薬剤師として働く。

漫画と違い、地味な日々だ。毎日、軽自動車のハンドルを握り、高齢者の自宅を5軒程度回る。家族から丁寧に近況を聞き、様子を見る。夏場の今は「薬もお水もしっかり飲もうね」と耳元で大きな声で言う。

休日でも薬剤師のスイッチをオフにしない。行きつけのカフェでは薬剤師であることが知れ渡っている。常連客は渡部さんの顔を見ると、薬の飲み合わせや体調不良について相談を始める。

砺波市のカフェ「ちゅーりー」の店主、吉田直子さん(56)は「頑固で他の人の意見を聞かないお客さんも、渡部さんが『かかりつけ医に相談した方がいい』と言うと、ちゃんと聞くんですよ」と笑う。

渡部さんにとって、そんな店は富山にいくつもある。「全然苦じゃないですよ」と笑う。富山に来てまだ1年半。ストイック

で朗らかな人間性が愛されている。

◇

医療はずっと身近なものだった。母は看護師で、仕事の話は自然と聞こえてきた。耳の病気で、入院や通院する機会が多かった。愛読書は、実家の書棚にあった一冊。終末期医療の権威、山崎 章郎さんが書いた『病院で死ぬということ』だった。最期の日を迎える患者の心と向き合った医師の記録だ。人生の主役であるはずの患者に、残り少ない日々をどう自分らしく生きてもらうか。耳の病気で悩む自身にも共感できるテーマだった。本を通じて緩和ケアに関心を持った。その延長線上で、薬剤師という仕事が将来の夢として浮かび上がった。

順風満帆な人生ではなかった。薬学部を目指していたが、受験を目前に控えた高校3年生の頃に大病を患った。ちょっと走っただけでも体が重い。どれだけ眠っても疲



「ホオズキ市」 西治 宇

れが取れない。病院に行くと、甲状腺機能亢進症と診断された。受験本番と入院がちょうど重なった。「体調を万全にしてからでいいや」と入試を見送った。

予備校に通ったが、不運は続く。受験の時期に合わせて、症状が重くなり、再び入院した。翌年も、その翌年も。

順調に進路を歩む友の姿に気持ちは焦った。それ以上に毎日薬を飲むのが苦痛だった。たった1錠飲むだけだが、「薬に生かされているだけ。そんな人生に意味があるのか」と落ち込むようになった。

英語の個別指導を受けていた際に、気まぐれに悩みを講師に打ち明けてみた。すると、「あなたという存在があるから薬が作用する。主体はあなたなんだよ」と言って

くれた。心が軽くなった。薬を利用して、自分の人生を生きているのだ。

同級生より3年遅かったが、大阪の大学に入学した。5年生になると、病院実習があった。しかし、そこでの体験は思い描いていた薬剤師の仕事とは少し違った。調剤がメインで、患者と触れ合う機会がない。話す相手は病院関係者ばかりだった。

若さの勢いか。国家試験を突破したにも関わらず、一度は薬剤師という仕事を見切った。大学のゼミでは、薬が耳に与える影響について説明しようとしていた。大学院で研究を続けることにした。4年間研究者として過ごした。薬剤師の国家資格は、ドラッグストアでアルバイトするのには役立った。米国留学も見据えていたが、研究者独特の人間関係のあつれきに疲れてしまった。アルバイトとしてではなく、薬剤師の仕事に本腰を入れることにした。原点に戻

った。緩和ケアへの関心が胸に残っていた。

◇

千葉の病院の緩和ケア病棟に勤めた。かつての実習先とは違った。患者と向き合いながら医師に相談し、薬を提案したり、投与量を調整したりできた。処方箋に疑問があれば、積極的に意見した。

病室を訪れば、患者のちょっとした持ち物や言動にも人生が宿って見えた。ベッドで手にする時代小説に関心を示すと、貸してくれた。感想を伝えれば、また新たに貸してくれた。別の患者は「何もできなくてごめんね」と不自由な体で頭をなでてくれた。励ますと、さらになでてくれた。

小さなやりとりの積み重ねで信頼関係を築くことは、渡部さんにとって大切なプロ

セスだった。患者が病気による苦痛の中でにじませる価値観は、投与すべき薬を考える材料になる。「終末期医療を必要とする人たちは、自分で意思を示せなくなる瞬間が来る。その時にどんな薬を使うべきか。判断するのは、医師や僕たちなんです」

愛読書を通じて、ぼんやりと憧れた世界に携わっている手応えがあった。しかし、緩和ケア病棟に薬剤師を手厚く配置することは、医療保険制度上、病院に利益をもたらにくい。勤務する病院は質よりも効率を求める経営方針に転換した。薬剤師は患者一人一人と接する時間が減った。やりがいを求める渡部さんは職場としての魅力を感じられなくなり、退職届を書いた。転職したのも緩和ケア専門の医療施設だった。しかし、その経営も立ちゆかなかった。

◇

理想の職場を探す中で出会ったのが、今勤める砺波の薬局だ。在宅医療に力を入れるタイミングだった。薬局を運営する社長は「薬剤師は薬の必要性を評価し、個人に合った薬をチョイスしないとイケない。もっと専門家としての能力を発揮するべきだ」と言い、渡部さんの思いを買ってくれた。縁もゆかりもない富山に移り住むことにした。寒風が吹き抜ける2023年1月だった。

在宅医療は、緩和ケアの仕事と地続きだった。自宅を訪れば、その人の暮らしが見える。壁のポスターや視聴中のテレビ番組に話題を移せば、価値観に触れられる。滑りやすいフローリングの床や、小さな段差を発見すれば「ここに気を付けましょう」とも言える。「ケアマネジャーや看護師の仕事とも重なるんですけど、患者さんも相手によって見せる顔が違う。そこは補い合えばいい」。薬を飲むことにストレスを覚える患者には、予備校生の時に聞いた言葉を伝える。「主体はあなたなんだ」と。

在宅医療に手応えを感じている。いつか同じ志の仲間を見つけ、自分の薬局をつくることが目標だ。主体が患者の在宅医療を目指す。「薬剤師っていらなくない？」なんて誰にも思わせない。

好きで薬を飲む人はそうそういません。何か事情があって、仕方なく薬を利用する人がほとんどです。処方された薬について漠然とした疑問や不安を持つこともあるでしょう。いざという場面で親身になって患者とコミュニケーションし、対応してくれる渡部さんのような薬剤師さんがいたら心強いですね。

紙面提供／人と鉄のあいだに



OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局

「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911

高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX

0766-25-7773

mail

niji@kitanippon.jp

次回掲載は8月1日(木)です。